

はしがき

本書（以下、上下巻を合わせて本書と呼ぶ）の目的は、第一に、二十世紀のイギリス、特にオックスフォードの地で「メタ倫理学（meta-ethics）」が発展してきた道筋を、G・E・ムーアが一九〇三年に出版した『倫理学原理』から現代までたどり直すことで、この間、英国の道徳哲学者たちはメタ倫理学において何を明らかにしようとして、何を論じてきたのか、そこで言われるメタ倫理学とは何なのか、ということの輪郭を描き出すことである。そして第二に、そこで抉出されたものと、その後の道徳哲学者たちの考え、そして特に読者自身の考えとを対比しながら相対化して捉え直すことを通じて、各自が自分自身のメタ倫理学上のスタンスについてより深く考えていくための手がかりを示すことである。

メタ倫理学とは

規範倫理学としばしば対比されるメタ倫理学は、前者が「現実のこの場面で私たちはいったい何をなすべきか」ということに具体的に答え、善悪の基準を示そうとする一階の倫理学であるのに対し、そもそもそこで言われている「べき」とは何か」「善」とは何か」を問う二階の倫理学であるとされる。メタ倫理学とは何か、ということも本書

全体で問われる事柄の一つではあるのだが、暫定的な定義を述べておくとすれば以下のようなになる。

道徳的・倫理的な営み⁽¹⁾(見方、思考、判断、行為、生活、生き方など)について、そこで使われている概念やその意味、前提されている事柄を明晰化したり、それらを成り立たせている世界、それらの営みに従事する私たち、さらに両者のかかわり合いについての事実を明らかにしたり、それらの事実についての理解を改善したりしようとしてみる。

たとえば、私たちは道徳的・倫理的な営みにおいて、何が善いとか、正しいとかいう判断をすることがあるが、そこで使われている善という概念は何を意味しているのだろうか。また、私たちは何のためにそのような判断をするのだろうか。そうした判断は客観的な正解をもつようなものでありうるのか。そうした判断に私たちは何を期待しているのか。道徳は私たちにとって必要なものなのか。

メタ倫理学はこうした問いに答えようとして様々な議論を積み重ね、その際、認識論や意味論、形而上学などの伝統的な哲学の議論、あるいは心理学や社会学、生物学などの知見も活用してきた。これらは、規範倫理的な問い——すなわち、典型的にはどんな行為が正しい行為かを尋ね、それに対して、「自らの立てた義務に従うこと」「最大の多数の最大幸福をもたらすこと」「有徳な人がなすこと」などといった仕方では答えが与えられるような問い——とは異なっており、そうした問いが前提にする事柄を問題にしている。⁽²⁾

メタ倫理学の二つのレベル

さて、本書で取り上げたいメタ倫理学の営みには二つのレベルがある。(1)道徳的概念にかかわるレベルと、(2)倫理学そのものにかかわるレベルである(以下、便宜上、それぞれを第一のレベル、第二のレベルと呼ぶことがある)。

(1) 道徳的概念にかかわるものとしてのメタ倫理学

第一に、メタ倫理学は道徳的概念や性質、事実と言われるものの在り方の解明にかかわる。予め述べておくと、この百年の主流のメタ倫理学はおおよそ三つの立場に分類できると言われる。自然主義実在論、非自然主義実在論、反実在論である。

大雑把に言えば、ここで言う自然主義実在論は、道徳的な性質や事実がそれ自体が自然的な性質や事実であるか、それらに還元できるか、それらと同一であるか、もしくは別の自然的性質から必然的に導出できるとする立場である。伝統的には善と快を同一視する古典的功利主義が自然主義を前提にしていると言われることが多いが、性格特性としての徳を倫理学の中心に据える徳倫理学の多くもこの立場をベースにするものであり、本書で登場する自然主義はアリストテレス主義と重なりも多い。

非自然主義実在論は、道徳的性質や道徳的事実は、自然的性質や事実ではなく、自然的性質や事実に還元することもできない、とする立場であり、プラトン主義に淵源をもつ。たとえば、先に挙げたムーアは、善は善であり、他の語で言い換えたり説明したりすることはできないと論じた。ほかにも義務や理由といったものが、還元不可能な道徳的（規範的）概念であると言われることがある。またその際、こうした性質や事実に言及する命題の真偽は、しばしば直観によって捉えられると主張される。

自然主義と非自然主義はいずれも何らかの意味で道徳的性質や事実が存在する、と主張する点で実在論と言われる

(1) 本書では基本的に、道徳と倫理を区別しない。ただし、文脈上必要な場合、たとえば、第五章(下巻)で取り上げるB・ウィリアムズのように明確に両者を区別して論じる議論を紹介する際には、それを断つた上で、両者を異なるものとして扱つた。

(2) 規範倫理学については、田中弘弘『文脈としての規範倫理学』(田中2012)などを参考にされたい。

立場であるのに対し、三つ目の反実在論は、そのようなものは存在しないと主張する立場で、根をたどればD・ヒュームやI・カントなどに関係づけられることが多い。典型的な反実在論的立場の一つである情動主義によれば、道徳的性質や事実は存在せず、善や悪は私たちの道徳的な感情や態度から説明される。私たちは何かを善いと呼ぶことで、自分たちの肯定的な態度を表現し、逆に何かを悪いと呼ぶことで否定的な態度を表現している、というわけである。イギリスのメタ倫理学の歴史は、これらの三つの立場がお互いにつつかり合いながら、それぞれに自分の主張を洗練させようとする過程だと考えることもできる。ただし、論争の中でそれぞれの立場は相手の良いところを取り入れようともするため、いつでも三者は明確に切り分けられるわけではなく、その主張は要所要所で入り交じっている。また、後の世代が常に前の世代よりも優れた理論を提出しているか、といえは必ずしもそうとは言えないところもある。

(2) 倫理学そのものにかかわるものとしてのメタ倫理学

メタ倫理学には、こうした道徳的概念をめぐる議論とは別の位相にある議論もある。それは、そもそも倫理学はどのようなものであるか、どのようなものであるべきか、という倫理学そのものの在り方やその役割を問うレベルである。たとえば、倫理学とはしばしば「いかに生きるべきか」を問う学問だと言われるが、「この私はいかに生きるべきか」と「人（一般）はいかに生きるべきか」とでは、問いの意味もそれに対する答えも変わってくる。さらに、現代倫理学はしばしば価値観が衝突するいわゆるモラルジレンマの状況での「私はどちらを選ぶべきか」という問いに見られるような、個別の行為選択の場面を主たる問いの領域に設定してきたが、そうではなく、「私はどんな人になるべきか」とか、「正義に合った社会とはどのような社会か」と問うこともできる。倫理学とは何をどんな仕方で行う学であるべきなのか。これについても、ムーア以来の道徳哲学者たちは様々な答えを提案してきた。

また、この節の最初に、メタ倫理学は規範倫理学と対比されると述べたが、そもそも両者の関係はどのようなもの

であるか、あるいは、どのようなものであるべきか、ということもまた、このレベルでの議論に含まれる。一方には、メタ倫理学は規範倫理学からまったく独立に営まれる学問であるという考え方があり、他方には、両者を独立に展開することはできないという考え方がある。これらは、規範倫理学とは何か、メタ倫理学とはどのようなものであるかという理解抜きには成り立たず、本来はメタメタ倫理学と呼ばれるべきかもしれないような議論であるが、これもまた、メタ倫理学の中で論じられてきた問いである。

このように、メタ倫理学には二つの異なるレベルがあるが、両者は相互に関係し合っともいる。たとえば、道徳的性質が行為のもつ性質であるなら、倫理学の問いが行為の是非に集中するのも自然である。他方、道徳的性質が社会のもつ性質であるなら、社会とは何か、というところから倫理学は出発する必要があるだろう。逆に、倫理学とは人の生き方を問うものであるなら、そこで焦点化される性質は、個別の行為の善し悪しよりも、もつと長い目で見た人の在り方であるかもしれない。

本書では、メタ倫理学がもつこれらの両位相を意識しながら、二十世紀のイギリス、特にオックスフォード大学において、メタ倫理学が様々な仕方で展開されてきた歴史を追いかけていく。⁽³⁾ これを通じて、冒頭に掲げたように、メタ倫理学において道徳哲学者たちはどんな背景のもとで何をしてきたのか、ということ、可能な限り明らかにしていきたい。

(3) 理論「ことの整理」に関心がある方は拙著『メタ倫理学入門』（佐藤 2017）を参照のこと。また、個人のエピソードにより焦点をあてたものとしては「シッフからはじめる不真面目な英国哲学入門」を謳った児玉聡『オックスフォード哲学者奇行』（児玉 2022）があげられる。

本書の方針

続いて、本書の方針について簡単に述べておきたい。基本的には世代で章を区切り、それぞれの章で数人の哲学者とその理論を紹介している。各章や節の冒頭では、時代状況を説明し、次いで、哲学者個人のバイオグラフィーを、なるべく他の研究者との関係性が分かるような仕方です。それぞれの章の最後には、取り上げた諸理論の対比、それぞれに対する批判や筆者による評価を盛り込んだ節を付した。以下に、本書で取り上げる道徳哲学者たちがどんな問いを立てたのか、ということを示しておきたい。第一章から第四章が上巻、第五章から第七章が下巻である。

第一章 「倫理学と直観」

この章で取り上げるムーア、H・A・プリチャード、W・D・ロスらは、一八七〇年代生まれで、前の世代であるH・シジウィックやT・H・グリーン、F・H・ブラッドリーらを批判対象としつつ、倫理学においてもっとも基礎的な概念とは何かを問い、さらに、それらを問う方法について論じる中で、倫理学とは何をどのように問うべきものか、ということを探求した。その際、「直観」が重要視され、それにもなつて直観とは何か、それによって分かること、分からないことは何か、ということも論じられた。

第二章 「倫理学と言語行為」

この章で取り上げるA・J・エアとJ・L・オースティンは、一九一〇年前後の生まれで、ムーアらよりさかのぼって倫理学の意義そのものについて問うた。彼らは道徳の営みを言語行為の側面から捉え、道徳的発話とは何をする 것인가と問い、それが他の発話とどう違うのか、あるいは同じなのか、ということ論じた。特に、ここでは道徳判断は直観に基づいて道徳的命題の真偽を示すことではなく、主観的な態度や感情を表現することなのではないか、ということが論点となつた。

第三章 「倫理学と道徳判断」

この章で取り上げるR・M・ヘアとP・フットは、一九二〇年前後の生まれで、戦争の体験を経て、倫理学が果たすべき役割を再考した。そして、道徳判断は発話者の主観的な態度の表現に過ぎないというエアラによる議論と正面から対峙し、言語の分析という枠組みにこだわりながら、道徳判断の客観性を追い求めた。そこでは、直観ではなく、理性や徳の役割が重視され、それらを通じてあらためて善とは何か、善が倫理学において占めるべき位置とは何かが問い直されることとなった。

第四章 「道徳判断を超えて」

この章で取り上げるG・E・M・アンスコムとI・マードックは、ヘアと同年の生まれだが、彼とは違って、既存の倫理学の外側から問いを立てた。たとえば「善い行為とは何か」を論じるなら、善だけではなく「行為」とは何か、さらにはその行為を駆動する心理学も論じられねばならないのではないか。あるいは、概念や言語のレベルではなく、存在のレベル、形而上学のレベルでも道徳は論じられる必要があるのではないか。これらを通じて、彼女たちは単なるモラルジレンマの解決とは異なる観点で倫理学を論じる可能性を問うた。

第五章 「道徳を超えて」

この章で取り上げるB・ウィリアムズは、一九二九年生まれで、ヘア世代の議論を総括し、倫理学あるいは哲学に何ができて、何ができないのか、を問うた。それらの限界を見定めた上で、「人はいかに生きるべきか」という問いに私たちはどうすれば答えることができるのかを問うことが、彼を動かした最大のテーマであった。

第六章 「再び、倫理学と道徳判断」

この章で主として取り上げる、J・マクダウエル、S・ブラックバーンは一九四〇年代の生まれである。彼らは前の世代、中でもJ・L・マッキーとD・ウイギンズの問題意識を引き継ぎ、道徳判断は客観的かというよりも、そもそも道徳判断が客観的であるとはどういうことを問うた。価値や真理が世界のうちに実在しない限り、道徳判断は客観的でありえないのか、感情や態度が関係する道徳判断はすべて主観的なのか、ということを経らは論じた。

第七章 「再び、倫理学と直観」

最終章で取り上げるD・パーフィットは一九四二年の生まれで、ブラックバーンと同世代である。彼はブラックバーンとは逆に、道徳判断から態度や感情の要素を徹底的に排除した形で、道徳判断を理解する可能性を問うた。ここでは倫理学におけるもつとも基礎的なものをめぐって、価値と理由の関係が論じられ、そしてそれらを理解するために、再び、直観という手法に焦点が当てられた。

こうした問題のいずれか(あるいはすべて)に関心がある方は、本書と共にメタ倫理学の歴史をたどり、メタ倫理学とは何なのか、自分のメタ倫理学上のスタンスとはどんなものなのか、という問いに解答することを試みてほしい。そして、それを通じてあらためて、自分自身にとって道徳的な問題とは何なのかについて考えてみてほしいと思う。